繪本江戸土産

江戸美やげ五編叙

抑東都江戸の名所古跡ハ百をもて算ふべし。然りといへども土地の廣狭にかゝはりて林泉の寛によりて人選て是を採ことは今省まで茲に載ぞ。神社佛閣といへども未こる人今この編に寫して其景をもいはゞあらぞ柳原そのうけての眺望あるを騒人遊客常に集ふ専ら其樹の地を擇

繪本江戸みやけ五編

廣重筆

金幸堂梓

春風や
催来維乃
魚市場

煙角

丈山大樹寺馬遠人画に一も堪らば
一ち扇が筆力まそその気を呈し図すれば
まことぬ書画代る絶人の巻を一図闊く
手及びふ古人ふまで名をのこす名画
志絶の端なるべし

しま(?)ゆ隠人誌

日本橋
この橋を江戸
江戸の中央として
諸方への道法これを
定む又魚問屋市
あり又橋の南に
拝禁戦し諸に
江戸第一の繁華之
橋の長さ凡二十八間
萬宝珠の銘に
万治元年戊戌九月
造立とあり

駿河町
けんきん
かけ値なし
呉服物品々
するか町
越後屋

鎌倉河岸
神田橋と常盤橋の間
御堀ぞひにして
繁華なる所なり
豊島屋酒店中
二月中旬の頃雛祭や
白酒を売るの
ときはさすがの広場も
人の山をなす光景
江戸の名物なるべし

ごぢゐんがはら
護持院原

筋違八ッ小路

昌平橋 聖堂

右に出せる筋違橋と並びかゝる昌平橋と北の方へ昇る昌平坂といふところに聖堂あり大成殿には孔子及び十哲の像を祀らるゝよし春秋釈奠の礼あり学問修行のものこゝに寄宿す和漢第一の学校なり

御茶の水
聖堂より駿河の方
絶壁にして風景よし殊に

水道橋

この川上に神田上水の懸樋ありけらこれ此川上の橋かく唱へり水道端の高なるべし橋より内は小川町と唱へ外は小石川と唱ふ

神田明神の社

本郷通

湯島天神雪中之圖
辨才天
歡喜天

同所
坂上眺望

上野黒門及三橋の圖

街に三ッの橋を架すところを三橋といひ俗に三枚橋といふ非なり黒門の方丸よりみて樹林をこえて堂に東叡山一の梵刹有難くいとたふとし若葉の頃此所に二王門のあたりより所柄の火災に回禄せしよし今は左右の礎のこ残ることまでを俗に称譽とかや

其二
山王山眺望

ころほひ是つゞき八重桜
さまざまに
なの木ある

日暮里諏訪明神の
社内の桜樹
花の頃は遊観の人
むらがり群集をなせり
東方は崖にして
崖の茶店を出し
ここより見下せば
遠望神田湯嶋の
森ら樹々をもち
ちくて涼風猜と
ちちし八重不夜
その花がちりしまで
春中の眺望
ことに勝るなり

其三
清水堂花見
右の山王に隣る
舞台高欄悉く
朱塗にて荘厳
美をつくせり其の傍
彼岸桜の大木
数十株ありて
の一奇観
雲のごとく雪に
似たり

其四
山門摺鉢山花見

其五
山門を入れば正面に
橋掛ありて其奥の方に
中堂あり後ろに金堂
珠玉を鏤め其結構いはん
方なし此橋掛りの
左右なるは法華堂
常行堂とて俗に
二ツ堂と唱る
是なり

同所
池之端料理屋

東叡山の麓にして
景色絶に勝るゝ所
料理屋軒をならべて
遊人の需に応ず
其家表ハ座敷にて
盃ひ東叡ハ恐ゞ(?)ての
池に対し坐して
風光美なるに
より眺望の楼上
酒客絶ず

其二 不忍之池全圖 中島辨天之社

この池ハ東西三丁余南北六丁ニまさり池中赤白の蓮華を生じて盛りの頃ハ観ハかくなき中嶋の弁財天四方ニ料理の酒楼ありて客ハ岸辺の花を眺め蓮の船より[illegible]酌む有様のごとく水に戯ふる浪に棲む鳥池中の一景実に風流の勝地なり

谷中
天王寺

根津権現社地紅楓

染井 植木屋

根岸の里

東叡山の北の麓すべてこれを根岸といふ元より閑雅幽栖の地にて文人墨客の世を遁るるのともがら庵を結ぶ人も多く自然風雅の地となれり

三河島（みかはしま）

煙浦

廣重筆

京都書林
寺町通松原上ル　菊屋七郎兵衛
同　下ル　勝村治右衛門

大坂書林
心斎橋南壹丁目　敦賀屋九兵衛
同通久太郎町　河内屋喜兵衛
同　博労町　河内屋茂兵衛

東都書林
横山町壹丁目　出雲寺萬次郎
日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　通二丁目　小林新兵衛
同　山城屋佐兵衛
芝神明前　岡田屋嘉七
淺草福井町　山崎屋清七
馬喰町二丁目　菊屋幸三郎板